現在歯数とサクセスフル・エイジング維持との関連：鶴ケ谷プロジェクト

The Association between Number of Remaining Teeth and Maintenance of Successful Aging in Japanese Older People: A 9-Year Longitudinal Study
2020 年　Tohoku Journal of Experimental Medicine 発表

サクセスフル・エイジングについて

これまでは長寿や健康寿命に着目する研究が多く報告されてきましたが、最近では身体機能の維持だけではなく、生活の質（QOL）や生活満足度が高い加齢（サクセスフル・エイジング）に着目した研究が増えてきています。本研究では、図１のように「高い QOL」、「介護を必要としない状態」、「生存」を果たしていることをサクセスフル・エイジングと定義しました。本研究では、QOL（健康関連 QOL）の指標として EQ-5D-3L を使用し、スコア（効用値）が満点である 1.000 の状態を「高い QOL」と定義しました。

高齢者のサクセスフル・エイジング維持には、現在歯数が 20 本以上であることが寄与する

私たちはこれまでに、現在歯数が多い者では死亡リスクや要介護発生リスクが低いことを報告してきました。しかし、これらの研究では QOL への影響は考慮されておらず、サクセスフル・エイジングへの影響は検討されていませんでした。

本研究は、ベースラインでサクセスフル・エイジングを果たしている高齢者を対象として、ベースラインの現在歯数が、９年後のサクセスフル・エイジング維持に影響するかを縦断研究で検討したものです。現在歯数が 0-9 本の者を基準としたとき、９年後のサクセスフル・エイジングを維持できている者の割合の比である prevalence ratio（PR）は現在歯数 10－19 本の者で 1.39 倍、20 本以上の者で 1.58 倍高いことが明らかとなりました（図２）。

図１．本研究におけるサクセスフル・エイジングの定義

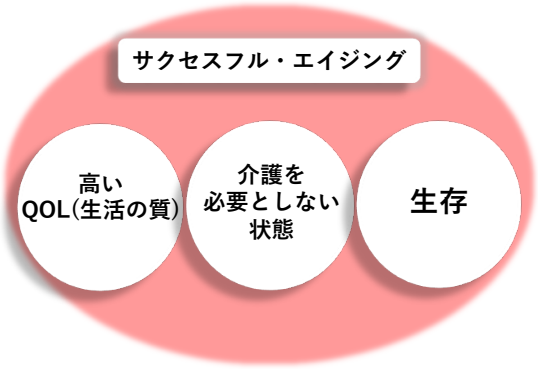
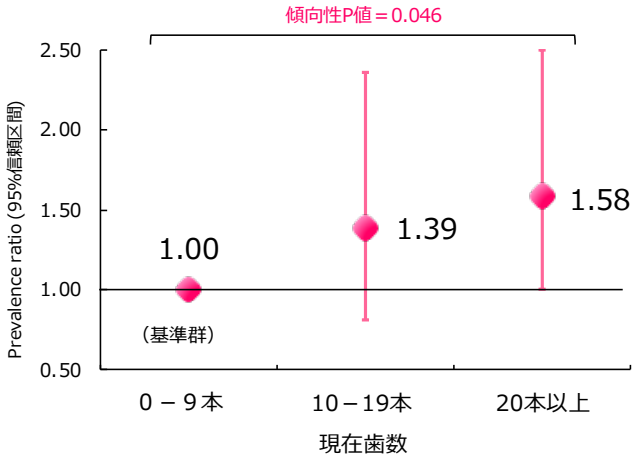


図２．現在歯数とサクセスルフル・エイジング維持との関連



研究のデータおよび現在歯数について

本研究の分析は 2003 年７月に実施した「寝たきり予防健診（高齢者総合機能評価）」の結果にもとづいています。「寝たきり予防健診」は宮城県仙台市宮城野区鶴ケ谷地区在住の高齢者（70 歳以上）の男女全員（2,925 人）を対象としており、923 人の方に参加していただきました。本研究では、現在歯数・EQ-5D-3L のデータ欠損者、ベースライン時に要介護認定を受けていた方、EQ-5D-3L の効用値が 1.000 未満である方を除いた 507 人に限定しました。追跡期間終了時点である 2012 年９月（追跡質問紙調査）に、生存かつ要介護認定非該当の者のうち、追跡期間中に転出した者、2012 年の質問紙調査に参加しなかった者、2012 年の EQ-5D-3L に無回答の者を除外した、450 人について分析を行いました。曝露要因である現在歯数は歯科医師により診査され、先行研究と同様に、0-9 本、10-19 本、20 本以上の３群に分類しました。

他のリスク要因の影響について

この研究では、現在歯数とサクセスフル・エイジング維持に関連する要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、調査開始時点での年齢、性別、既往歴（脳卒中、心筋梗塞、がん、または糖尿病）、喫煙習慣、飲酒習慣、身体活動量（METｓ）、教育歴、認知機能について、多変量解析による調整を行いました。

研究の特徴と限界について

本研究は、①現在歯数とサクセスフル・エイジング維持との関連を縦断研究で示した点、②現在歯数は自己回答ではなく歯科医師が診査したこと、介護保険情報やEQ-5D-3Lなど妥当性の高いデータを使用した点が特徴です。一方、本研究の限界として、①残余交絡の可能性がある点（経済状況など）、②健康関連QOL（EQ-5D-3L）のデータがベースラインと2012年の2時点でしか得られなかった点、などが挙げられます。